

## 早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター(WAVOC)主催 「早稲田大学東北復興スタディツアー」報告

○石巻市の(株)石巻精機製作所の松本賢社長(石巻地方稲門会会長)の話を聞きました。

鉄工業を営み、震災時には 2.5m の津波浸水を受けられました。ライフラインの断たれている状況下から、お客様の工場の復旧工事のお手伝いを通じ、「機械のお医者さん」として地域の復興に取り組んでおられます。

印象的なお話は、「BCB はやっておくべきだがお金がかかる。」

「地域の基幹事業体である日本製紙の工場が撤退せず、仕事があることがありがたい。自立の精神が大切。」

「3・11の発災から 4 日間は一切の情報が入って来なかった。携帯が通じたのが3・19、3・22に会社に集合して再建に取り組むことにした。」

「社員の被害もまちまちで、一家五人 1 を失った社員もいた。50 人の希望する社員に 100 万円を当座の資金として貸し付けた。10 年かけてでも返してもらえばいい。」

「早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンターと相談の結果、9・4、男声合唱団早稲田グリーンクラブを招へいでき、市民 450 人の聴衆に校歌、紺碧の空、そして地元の斎太郎節の力強い歌声が響き、歌を忘れていた我々は音楽が持つ魅力に改めて感動し、涙を禁じ得なかった。」

最後に、「石巻市の被害は甚大で瓦礫の量だけでも岩手県に匹敵します。復興は計画が示されただけで街の景色は色を失ったままです。経済という言葉は、経世済民が本来の意味です。この言葉を噛み締め、これから私たち一人ひとりが「一燈照隅」の精神で家族、会社、そして地域のために一歩一歩前進して参る覚悟です。」と語られました。



1



○岩手県陸前高田市の岩手県立高田病院、院長の石木幹人さんから「地域医療と復興」として話を聞きました。

県立高田病院は、4階建ての最上階まで津波が押し寄せ、入院患者15人、職員9人が亡くなった。入院患者を含む160人が屋上で一晩孤立し、3人の患者さんが夜のうちに亡くなったという。妻のたつ子さんも津波の犠牲となられた。3・13から3・22まで自身のことはさておき16人のスタッフで休みなく働いた。その後、2週間休暇を取り、その間に奥様も海中から遺体で見つかったという。

石木医師の語られた教訓は、①通信が完全に途絶えることを想定した防災訓練を行うこと。②通信が遮断した場合は、それぞれの判断で行動すること。③情報を集めるマーケティングが大切。そのためには、コミュニケーションスキルを磨きグループワークを職場の文化にしていく必要がある。の三点にまとめられました。

また、今後の地域医療については、高齢化が進む中で、在宅介護は非効率で、高齢者が互いに支え合う社会の仕組みづくりとコミュニティの再生を地域で考える必要があると言われる。

最後に、①問題は山積②忘れられることがこわい③実際に被災地に足を運び感じて欲しい。とまとめられました。



○リアス牡蠣まつり唐桑会場ナウ!!無料試食の炭火焼に長蛇の列です。





○気仙沼復興商店街青年会長の坂本さんです。「風化がこわい、継続的なリピーターがうれしい。」とのことです。



○大学生を中心に月1回訪れてのアカペラワークショップ。今日で第12回、30年間続けるのが目標だという Always With Smile のみなさんです。





＜奇跡の一本松＞

＜気仙沼稲門会のみなさまとの懇親交流会＞

